

新たな一歩

— 大遠諱に向けて —

新年おめでとうございます。また喪中の方にはお見舞い申し上げます。

新しい年を迎えました。今年は午年であります。駆け抜ける馬のように勇往邁進し、困難を恐れず挑戦を重ねたいと思います。

昨年で管長に就任して十五年となりました。管長という職は五年任期であります。昨年の三月末まで三期十五年を勤めさせてもらってきました。無事勤めることができたのは皆様のおかげであります。

就任してすぐに円覚寺の中興開山大用国師さいせつしやうちよ誠拙周樗じゆしゆ禪師の二百年大遠諱、釈宗演老師の



百年遠諱の準備に取りかかりました。それに向けて宗務本所の改修、大玄閣の新設、そして蔵六庵を再建して檀信徒の法要に用いられるようにしました。

三井記念美術館や慶應大学、花園大学で特別展を開催しました。授戒会も催して多く方に授戒してもらい仏縁を結んでいただきました。それから更に、新しい禅堂の建設、居士林の再建に取り組んできました。その間にコロナ禍もありましたが、どうにか乗り越えて今日に到ります。新しい居士林は昨年の春に落成して、ただいま黄梅院の青蓮室・内田一道老師に

居士林の師家としてご指導いただいています。

私としては三期十五年、もう十分な仕事をしてきたつもりでありましたが、円覚寺派を代表する和尚様方が集まる宗議会で、更にもう一期を務めるようにと議決されたのでした。一昨年還暦を迎えましたが、当初目指していた「六十歳定年」にはなりませんでした。次は「六十五歳定年」を目指します。

昨年管長四期目となって気がついたのは、開山仏光国師の七百五十年の大遠諱がちょうど十年の後に迫っていることでした。境内の大きな整備事業などは十年がかりで準備しないとなりません。これはまた新たな出発だと思ったのです。

たとえば円覚寺の入り口である山門の老朽化が進み、修理の必要があると言われています。また選仏場も修理が必要となっています。更には洪鐘おがねの鐘楼が危険なくらいに朽ちかけていますので再建の必要があります。

洪鐘は国宝、山門は神奈川県の重要文化財

ですので、それぞれ許可が必要ですし、資金の調達もしなければなりません。近年物価も高騰し職人さんも不足がちです。どれも年数をかけての事業となります。馬が駆けるようにはゆきませんが、じつくりと取り組んでゆかねばなりません。

昨年が大遠諱まで十年でしたので、今年はあと九年となります。大遠諱は次の代の方に





お任せしたいと思いますものの、その土台は今のうちに作っておかねばなりません。

管長に就任して先に記した中興開山の遠諱や境内整備、居士林や禅堂の工事などに追われて、十分にできなかったことがあります。それは「親化」というものです。円覚寺派の各寺院に管長が出向いて教化をすることで、円覚寺派の宗制にも管長のなすべき勤めとして明記されています。「親化」の「親」というのは、「みずからする」という意味で、管長自らが各寺院に出向いていくことです。

円覚寺派は十四の教区に分かれています。いくつかの教区の寺院には親化に参りました。しかし、まだほとんどの教区には行っていないのです。なんとか開山大遠諱に向けて各教区の寺院にお参りさせていただきたいと念願しています。

今年の年頭の色紙には「清楽」という言葉

揮毫しました。これは『坐禅儀』にある言葉です。昨年修行僧たちに『坐禅儀』の講義をしていて良い言葉と思ったのでした。

坐禅というと足の痛いのを我慢して修行するという印象が強いと思いますが、『坐禅儀』には「坐禅は乃ち安楽の法門なり」と書かれています。安楽の教えなのです。そのあとには「而も人多く疾を致すは蓋し用心を善くせざるが故なり」とあります。怪我をしたり体を壊したりするのは十分用心ができていないからだというのです。

今は昔と違って生活習慣がずいぶんと変化しました。イスに坐っての生活が中心となっています。修行道場に来る青年たちも坐ることに慣れていないことが多く、体をほぐしたり体操しながら坐禅に慣れてもらうように努力しています。膝や腰を痛めたり体を壊すことのないように注意しています。

また一般の方のためにはひろく「イス坐禅」をお勧めしています。昨年は『イス坐禅』とい

う本も上梓しました。単に苦痛を与えるのではない「安楽」の坐禅を体験してもらうものです。

『坐禅儀』には正しく坐禅すれば「自然に四大輕安にして精神爽利に、正念分明にして法味神を資け、寂然として清楽ならん。」と説かれています。

正しく坐禅すると、自ずから身体は軽く安らかになり、心は爽やかになります。意識は統一されてはつきりとしてきます。そのようにして仏法の深い味わいが私たちの精神を育ててくれます。どこまでも落ちついて安らかに楽しいことになります。

この「寂然清楽」というのは良い言葉だと思います。そこから「清楽」の二文字を揮毫したのです。

『イス坐禅』の本も好評で多くの方に読んでいただいているようです。あの本では動画でも実習できるようにしています。またご要望をいただいている所でもイス坐禅の指導



をさせてもらっています。

お寺に行つて本堂の畳の上で、足を組んで坐るのはとても良いことです。実際に床の上で足を組むことの安定感にまさるものはありません。ただ日常の暮らしでは、畳に坐ることが少なくなってきました。オフィスの中で、あるいは電車に乗っている時、移動の時などいつでも坐禅ができるようにと工夫したのが、イス坐禅です。今年も弘めてゆきたいと思っています。

姿勢を調べ、呼吸を調えることでもたらされる楽しみを多くの方に味わっていただけたなと思っています。

思えば坐禅を始めたのがまだ十歳の時でした。中学二年の頃から独参を始めていました。「公案」という禅問答に取り組んできました。中学生の時にNHKラジオの『宗教の時間』で『天台小止観』の講

義を聴いて感銘をうけました。松居桃樓先生の講義でした。「止観」の修行は松居先生は「感情を波立たせないこと」と「思考力を正しくはたらかせること」と優しく表現されています。そして修行によって目指す人格を「いつでも、どこでも、なにものにもほほえむことができる人」だと説かれました。「止観」の修行は坐禅のもとでもあります。そんな言葉に感銘を受けて五十年近く坐禅だけを実習して今日に到ります。

いろいろと課題も多く、困難なこともあります。まずニコニコ笑顔で参りたいと思っています。

松居先生は仰っています。人間は幸福だからニコニコするのではない、ニコニコすれば幸福だと感じるのだと。

新しい年を迎えました。ニコニコしながらも真剣に新たな一歩を、進めて参りましょう。